

〔研究論文〕

文化観光論序説

——ベルギーのエコミュージアムを中心として——

山 崎 茂 雄

1. はじめに

いま、グローバル時代の成長産業として、観光産業や文化産業が衆目を集めている。

都市や地域に魅力に満ちた観光産業、文化産業が育ち、それらの産業が人々を惹き寄せ、新しい消費需要や交流人口を生む。交流人口の増大は、とりわけ人口減少で悩み、委縮しがちな地方の需要を喚起する。こうした循環に目を向け、文化や観光の相互作用、あるいは文化と観光の結合は、「文化観光」という枠組みで地域の経済に大きなインパクトを与えることが期待され始めた。

それでは、交流人口を拡大させるためには何が必要か。それは、戦略的に国内の訪問客のみならず外国人観光客を呼び込むことが大事で、その方策として都市や地域の「創造的再生」を目指すべきという議論がある。

この創造的再生を基礎とする都市論、地域論は、すでに1990年代から世界的に注目されてきた。90年代以降の研究史を振り返れば、ピーター・ホールの創造的ミリュー(Hall, P. *Culture, Innovation, and Urban Order*, Weidenfeld& Nicolson, 1998)、チャールズ・ランドリーの創造都市論(Landry, C. *The Creative City: A Toolkit for Urban Innovators*, London, Commedia, 2000)、リチャード・フロリダのクリエイティブ都市論(Florida, R. *The Rise of the Creative Class, and how it's Transforming Work, Leisure, Community and Everyday life*, Basic

book, Florida, R. *Cities and the Creative Class*, Routledge, New York, 2005)などが著名である。

アメリカの地理経済学者、アン・マークセンも最近注目されているひとりである¹⁾。

その創造都市論においては、大都市を中心に、企業家精神と文化産業(出版、映像、実演芸術、レコード、映画、テレビ制作、ファッション、玩具、ゲームなど)が雇用や所得、新商品やサービスのスピン・オフ、ビジネスや熟練労働者の結合をもたらし、ここにおける創造の場づくりと経済発展がアメリカ都市の未来を拓くと指摘されている。

とりわけ、マークセンは、小都市においては、伝統文化や景観のほか、ダウンタウンの再生をもたすアートフェスティバルなどが人々の観光行動を刺激し、また大規模な文化施設のネットワークがこれらにより維持・強化されるという。

そもそもマークセンは、アメリカの地域再生(ミネソタ州の小さな町、カリフォルニア州のベイエリアなどが対象)を詳細に分析した。彼女は、地方・地域レベルの経済発展を考えるにあたっては、以下の視点に注目する必要があることを示唆した。

マークセンによると、非営利の芸術文化セクターの存在とそれによる投資が重要で、これらは、経済発展を導く特別善き理解者(アドボカシー)になる。というのも、それは、その組織の特徴ゆえであり、また芸術団体固有の

(intrinsic) 貢献は大きな影響力を持つからである。その場合、地域経済開発の開発者および芸術家、そして芸術を理解し、支えていく組織の存在が必要とされる。

あるタイプの基本的消費活動における投資は、新たな雇用と所得を生み出す可能性を持つからである。①地域的な財やサービスを生み出すことで得る自由な収入が消費される機会があり、②技術革新の種がまかれ、それがやがて市場の拡大をもたらす、③他の地域よりもその地域でより支出される団体や職業を育てていく、起業家、企業、従業員たちをその地域に惹きつけると同時に踏みとどまらせる、ということが重要であると説かれる²⁾。

結論として、マークセンは、創造的な場づくりをもたらす文化的投資の重要性を指摘する。

これらは、日本の創造都市にもみられる傾向である。けれども、日本の場合は、アメリカと明らかに異なる事情があることに留意しなければならない。

第一に、地理的伝統として、都市では木造の古い民家が密集し、しかも今日民家の7軒に1軒が空き家と化している。他方、農村には、零細な土地所有が分散し、大規模農業ではなく、労働集約型産業としての農業が支配的である。

第二に、各地の固有の自然および固有の文化的伝統・習慣が継承され、文化的多様性が各地に分布し、それゆえ画一的な都市化が回避されてきた。

第三に、1990年代から各地で整備されてきた大規模な文化施設は、その維持管理費用がやがて膨大となり、今では自治体財政の深刻なイシューとなりつつある。

こうした地理的伝統や日本の特性を視野に入れた観光戦略をいかに構築していくか、また空き家や産業遺産など未活用資源の活用をどのように観光や地域再生につなげていくべきか、これらは今日の課題といわなければならない。

では、マークセンがいうように創造的な場づくりをもたらすには、新たな文化投資が必要であろうか、それとも文化投資に代わる要素として何が必要であろうか。そもそも地域の歴史・文化・産業を視野に入れた文化観光とはいかなるものが問題となる。

この点、欧州の文化観光が参考になる。M.K.スミス・M.ロビンソン編『文化観光論』上巻には、次のように記されている。

パリ、ローマ、ベニス、アテネのような十分に確立した文化中心地は、観光の初期の時代から卓越した地位を維持しているが、空の旅が安くできるようになったので、とくにジロナ（訳者注：カタロニアの都市）、プラチスラバ、リガのような比較的小さないくつかの場所での文化遺産や芸術を人々が味わう新たな機会が生み出された。文化観光のこのような明白な民主化は、主に都市との関連において、高度に競争的で、ますます洗練されてきたマーケティングによって助けられたのである。「欧州文化都市」キャンペーンは、観光目的地のブランド化に強力に重点を置き、このやり方でとくに成功を収めたし、また、文化が高度に「道徳的な」産物であるとともに、その集客能力を通じ、経済的にも利益になるという考えを支持するための活動を行った。

この脈絡において、文化観光の概念はいたるところで支配的になっているように思われる³⁾。

スミスらによれば、文化観光とは、文化遺産や芸術を人々が味わう観光ということができ、欧州文化都市の戦略は、まさに文化観光を射程に置いた戦略と捉えられよう。

そこで、本稿は、筆者が2015年8月24-31日に現地調査したベルギーの産業遺産、ボワ・

デュ・ルックを題材として、こうしたことについて論ずることとしたい。

2. エコミュージアムのボワ・デュ・ルック

2.1 エコミュージアムとは何か

文化観光の歴史が根ざすヨーロッパについて、交流の結節点という視点でみた場合、ミュージアムは大きな位置を占める。ミュージアムとその周辺がユネスコによって世界文化遺産としての価値があると認められたのも、ヨーロッパの地においてである。本稿においては、筆者が2015年8月に現地聞き取り調査をしたベルギーの野外ミュージアム、ボワ・デュ・ルック (L'Ecomusée de Bois-du-Luc) を取り上げよう。

野外ミュージアムは、別名エコミュージアムと呼ばれる。とりわけフランス語圏はエコミューゼとの呼称を持つ。エコミュージアム (エコミューゼ) の意味として、通例は、リビエールの定義が一般である。

それによれば、エコミュージアムとは、地域社会の人々の生活とそこでの自然環境、社会環境の発展過程を史的に探究し、自然遺産および文化遺産を現地において保存、育成、展示するミュージアムとされる。そして、周辺の地域社会の発展に貢献することがその大きな目的である。

ボワ・デュ・ルックは1983年にベルギーにおいて、初めて完成したエコミュージアムである⁴⁾。ボワ・デュ・ルックがユネスコに世界文化遺産に指定されたのは、2012年7月のことである。

正確に言えば、世界文化遺産の対象となったのは、ワロン地域の主要炭坑群を包含する範囲である。ベルギーの炭坑の4つグラン・オルニュ (Grand-Hornu)：エノー州のシャルロアカジエの森 (Le Bois du Cazier)：エノー州のモンズブレニー・ミーヌ (Blegny-Mine)：リエージュ州、

ボワ・デュ・ルック (Bois-du-Luc)：エノー州のボワ・デュ・ルックである。

なかでも、ブレニー・ミーヌは現在も稼働しており、一方グラン・オルニュの近代の活動をユネスコは評価した。また、カジエの森は大きな炭鉱事故があったものの、ボワ・デュ・ルックは炭坑のすべての産業のインフラが残っている。この4つで炭坑全体がユネスコの高い評価を獲得したのである。

このエコミュージアムはルビエール市 (La Louvière) に位置する。この市の人口が25千人で、それを含む広域圏のレジオン⁵⁾ (Région wallonne) の人口は25万人に及ぶ。ボワ・デュ・ルックは最小のコミュン単位であるが、ルビエール市は11のコミュンを持つ。

ミュージアム施設の所有者は1973年から80年までベルギー政府であったが、1980年からはワロン州政府の所有下にある。また、その大きさについていえば、その面積は20ヘクタールに及ぶ。

2012年の世界遺産の登録にあたっては、ワロン州政府の貢献によるところが大きい。というのも、1996年にすでにミュージアムの建築物がワロン地域文化遺産指定を受けていた⁶⁾。さらに、2011年ワロン地域から建物に限らず、すべての周辺環境、ボタ山などが州政府により文化遺産指定されていたからである。

2.2 設立の経緯

知られるように、ベルギーはフランスと並んで文化施設、教育施設が多い。なぜ、この20ヘクタールの面積を有する広大なエコミュージアムをあえて整備する必要があったのか。その経緯について次に述べることにしよう。

1973年から1993年までが産業用地からエコミュージアムへの転換期間である。1973年はこの炭鉱の操業停止時期に当たる。炭鉱会社のボワ・デュ・ルック社として次の取り決めがな

された。すなわち、株主に対し妥当な配当金を保証すること、文化遺産の保護に努めること、旧労働者の年金を保証すること、そして炭鉱作業による労災補償等が、この会社の責務とされた。

一方、処分措置の一環として、決算上赤字となっている旧労働者用住居の売却が提案された。会社の閉鎖発表により Carrés と呼ばれる旧炭鉱労働者住居の住民は、生活の基盤を失うことを危惧し始めた。この旧炭鉱労働者住居には、すでに多くの住民がこの地に居住し、ここで生活していた⁷⁾。そのため、住民の生活と生活の拠点を守る必要があった⁸⁾。やがて、権利擁護委員会が発足する。

まず、住民の生活を守るために行われたこと、それはベルギー政府が Carrés と称される旧炭鉱労働者住居を買収することであった。買収が実施されたのは、1974年10月14日のことである。住居の買収と同時に、政府は国立ハウジング協会、引き続きワロン地域に改築の委託をした。

では、展示、収集品についてはいかなる形で行われたのであろうか。産業遺産として最も重要な要素がドキュメントなどの収集・保存であることはいうまでもない。この点、公文書や証言・証拠の保存を目的として、レジョン・デュ・サントウルと呼ばれる地域圏⁹⁾の産業組織や歴史家たちは1975年に非営利組織、C.H.A.I. エノー州歴史及び産業考古学センターをそれぞれ創設する。

やがて、彼らは1979年5月ボワ・デュ・ルック炭鉱用地を政府から買い戻した。産業用建築物の復元工事は1981～1983年に施工された。そして、1983年5月18日には、地域圏エコミュージアムが設立された。フランスやケベック州のエコミュージアムと同様、その基礎となったのは“テリトリー・住民・歴史”の3要素である。

2.3 エコミュージアム設立の目標

ミュージアムの設立にあたっては、多くのミュージアムがそうであるように、目標なるべき地点が明らかにされなければならない。エコミュージアム設立にあたり非営利組織が目標としたのはいかなるものであったのであろうか。

それは、端的に言えば、地域圏の対象範囲である地域の知識、配置整理、開発を目的とした文化開発集合プロジェクトに住民自身の積極的参加を促すことにあった。これらの活動はテーマ別展示から文書館、オブジェ、地域文化遺産である建築物の運営管理に至るまで幅広い対象範囲を含んでいる。

1994年には Carrés と呼ばれる旧炭鉱労働者住居は、ワロン行政地域政府から、「Le Foyer louviérois」に譲渡された。Le Foyer louviérois とは、改装・改築工事の保証をした福祉住宅組織のことである。第2次都市計画では、Carrés と呼ばれる旧炭鉱労働者住居の住民約600名を対象にした社会・経済的再生（パブや催し物会場の経営管理、文化交流目的の飲食店の創設、産業施設に於ける受け入れ体制等）とそれを基盤とした社会政策面に目標が定められた。

ボワ・デュ・ルック地区は1994年に文化財指定を受け、1999年には特別地区としての認可を受けた。産業用地部分は、Feder/Objectif I（地域開発を目的とした欧州連合およびワロン行政地域政府のプロジェクト）の枠組みの一環とされた。そこでは、人と機械をテーマとした文化観光プロジェクトの開発が念頭に置かれ、1995年エコミュージアムが所在する地域圏と長期にわたる開発のための契約が締結された。そして、1999年3月には、聖エマニュエル聖名祝日の掘削⁸⁾から工事が開始された。そうして、プロジェクト全体が完成したのは2000年の春のことであった。

2.4 エコミュージアムの思想

中世から今日まで、ボワ・デュ・ルックの地区は炭鉱産業の歩みとともに偉大な変化を遂げてきた。周知のように、複数共通言語を持つベルギーは、大きくオランダ語の一種のフラマン語圏およびフランス語圏にわかれる。後者は、ワロン圏とも呼ばれ、長らくフラマン語圏との経済的発展の格差が指摘されてきた。今日のボワ・デュ・ルックの地区のめざましい発展は、炭鉱産業抜きには語ることができない。

一方で、19世紀における類まれな父権主義、時が拭い去ることのできないワロン炭鉱労働者の危険で冒険的な足跡などは負の遺産として、人々の記憶のなかに今なお残存している。ボワ・デュ・ルックのミュージアムの思想は、こうした光と影を含む全容を無傷のまま私達が後世に伝えていく責務そのものである。これら光と影を含む全容は色褪せたり、破損されたり、消滅したりする可能性にさらされる。しかし、その可能性を持ちながらも、仕事や機械に立ち向かっている人間の姿を次世代に伝承する必要があり、そのために、保存されて復元され、整理され始めたわけであった。

翻って、エコミュージアムの概念の中で重要なものを考えたとき、場所および人、そして何よりも両者をつなぐ時間軸を想定できるであろう。その意味で、エコミュージアムが発展し、持続的な発展を遂げていくには、時間軸を記憶として共有する地域住民は発展の不可分の存在なのである。

2.5 場の記憶と地域住民

これまで様々な形で地域住民は大きく寄与した。では、場の記憶は地域住民のなかでどのように表出され、ミュージアムのドキュメントに保存されてきたのか。

展示会の協力はもとより、実際ボワ・デュ・ルックの炭坑の労働者の証言の録音、炭鉱産業

に関わる彼らの所有物の寄贈などが存在した。そうした重要な貢献はミュージアムの発展になくはない。

ある書物は、この地域全体（100のコミューン）における婚姻関係を調査したものである。この書は1988年の発刊であるが、それに先立ってこれに関連する展示会が行われていた。その際には、すべての住民、ベルギー人に限らず出稼ぎ等トルコやモロッコからの移民も含む、あらゆる住民が参加した。いかなる形で婚姻が成立し、家庭が築かれ、やがて地域で民族や宗教を超えた共生関係が成立してきたかの調査がその基本をなしている。

この30年間の間にエコミュゼの展示会は200回を超える。また、書籍の出版は40点以上に及ぶ。それらはエコミュゼのイニシアチブのものもあるが、ワロン地域のアソシエーションの要請によるもの、この地域の観光局の要請、科学的研究団体の要請で行うものもあった。ワロン地域のアソシエーション、観光局、科学的研究団体、この3団体が主要な基盤となる団体である。

一例としていえば、かつてガラス産業が栄えた地区を持つ自治体があるが、その自治体からガラス産業に関する展示会開催の要請があり、調査がなされ展示会が開催された経緯も存する。

そして、1986年はベルギー全体のビール年であった。このことから、ワロン地域及びベルギー政府の協力を得て、この地域全体のビール産業についての展示会が開かれた。

加えて、1984年から2000年にかけての16年間は書籍出版のプロジェクトが活発となった。ある特定のテーマが決められた。例えば、それは民俗、民族学、産業などで、それに関する研究がある。「最後の旅」(Le dernière voyage)の研究では、死に関する情報の調査が行われ、いかなる埋葬方法があるか等の学術的研究がなされた。

一方で、公共団体以外のさまざまな団体による研究（展示会）等も行なわれる。地域市民との協力ということになれば、ルビエール市の住民と深い関係を持つ。かつて市民参加を促す展示会、世界の市場（Marche de Monde）のようなものが開催された。その際にはルビエールの市民は誰でも参加でき、それにふさわしい所有物を持った人が持ち寄って参加した。もちろん、参加したのはルビエールの住民とは限らない。

2.6 場の記憶の領域

このミュージアムがユネスコに世界遺産指定されたのは2012年で、ワロン地域の主要炭坑群に対するものであったことはすでに述べた。

対象はベルギーの炭坑の4つで、グラン・オルニュ（Grand-Hornu）：エノー州のシャルロア、カジエの森（Le Bois du Cazier）、エノー州のモンズ、ブレニー・ミヌ（Blegny-Mine）：リエージュ州ボワ・デュ・ルック（Bois-du-Luc）、エノー州のボワ・デュ・ルック、ブレニー・ミヌはまだ稼働している炭坑である。

このうち、グラン・オルニュは近代の活動が対象とされている。カジエの森は大きな炭鉱事故があった。他方、ボワ・デュ・ルックは炭坑の全ての産業のインフラが残っている。世界文化遺産は、この4つで炭坑を代表するコンプレットセットになっている。

2012年の世界遺産の登録にあってはワロン政府の貢献が大きかった。

たとえば、1996年にすでに建築物がワロン地域文化遺産指定を受けていた。そして、2011年ワロン地域から建物に限らず全ての周辺環境、ボタ山などが文化遺産指定された。

2.7 ミュージアムの実践

では、具体的にいかなる実践が行われているのか。つぎに、この点について記すことにしよう。

まず、対象が問題となる。地域独自のアイデア、地域社会の固有性、地方の特徴に重点が置かれているのであろうか。活動すべてが局所的視点にのみ重点を置いているわけではなく、もっと幅広い視点に立ったプロジェクトへも参加している（地域、国、欧州レベル）。

もっとも、このエコミュージアムは、地理的共通特徴のある地域についての活動は存在する。例えば、北フランスとベルギー Hainaut 州の産業サイトを統合したICI (Itinéraire de la Culture Industrielle) と呼ばれる欧州Interreg IV プロジェクトが該当する。これによって、書籍の合同出版、探索ルート地図の作成、その他の活動がなされている。

すでに設立の経緯で触れたように、もともとボワ・デュ・ルックの旧石炭産業会社の産業遺産（建築物及び炭鉱自体）の価値を持続し、保護するのがその目的であった。

それゆえ、エコミュージアムはこの点で特徴づけられる。アイデア自体は他の産業サイトにも適用可能であるが、エコミュージアムとして、3つの評価基準を満たす必要がある。すなわち、その3つとは、①場所、②歴史および③過去と地元住民の関連性を指す。

エコミュージアムとしての具体的活動、プログラムとはいかなるものであろうか。それにはエコミュージアムという性格から、住民の参画を目的とした活動の企画をあげることができる。ベルギーには、Métis コミュニティと呼ばれる欧州白人以外の人種との混血人種の共同体がある。Métis コミュニティのような特定コミュニティに属する住民を含み、ライティング・カリグラフィーのワークショップ、実地見学などは、このミュージアムの中心的プログラムである。さらに、教育目的としては、学校教育向けプログラムが存在し、旧鉱山におけるボタ山での固有の動植物群などの発見ツアーなどの企画・実施はそれである。

3. 保存、保護、遺物と資源の保全の取り組み

3.1 研究者との関わり

さらに、保存、保護、遺物と資源の保全にいくかなる取り組みがなされているかをみていくことにしよう。

多くの場合、炭鉱サイトに関連した種々の活動、ガイド付見学、出版物、展示会などにおいて、研究者、ブリュッセル自由大学などの学生を対象に研究状況の範囲内で進んで受け入れがなされている。ここでは、出版や展示会プロジェクトに関与する科学チームが編成されており、このメンバーは学術界（関連分野の専門家）への呼びかけを行う。その例として、世界的スケールの鉄道駅に関する書籍の共同著作をするプロジェクトがあった。それにあたり、エンジニア、建築家、芸術史研究家、歴史家をはじめとした多様な領域の研究者らが招集された。

サイトと過去の価値開発に地元住民の関与を促進する目的で、可能な限り彼らとともに活動することが試みられている。また、彼らが日常接する文化遺産への意識向上が図れている。2013年に、Cités Métisses 一白人以外の人種との混血人種コミュニティにおける活動は、その例であろう。

3.2 芸術家、職人、作家、役者、音楽家などとの協力関係

このエコミュージアムにおいては、とりわけ芸術家との関係を強調しなければならない。地域の芸術家との協働プロジェクトの展開はその証しである。

2015年の活動のいくつかを挙げる事ができるが、ワロン地域の炭鉱見学訪問、文学的散策、アート・ワークショップ（ライティング）、特別展示会（ホモ・ファーベル）などがある。これらはいずれも可能な範囲でミュージア

ムスタッフの積極的な協力の下で行われるものであるが、修復作業やサイト保存については I P W ワロン文化遺産機構（l'Institut du Patrimoine Wallon）との協力体制の下で実施されている。

3.3 無形財産のレガシー

芸術家との関わりについていえば、無形財産との関係についても触れておかなければならない。伝統芸能、音楽、技術、文学、習慣などは無形財産と呼ばれるものである。この点、その保存・継承をめぐるのは、地域センターの芸術家たちと協働しての活動作業がその中心となる。とりわけ、特別展示会、貢献度の高いワークショップが対象となる。

またワロン地域の見学訪問も実施されており、Journées du Patrimoine（文化遺産めぐりの一日）、文学散策（地域の作家への認識度向上を目的として実施）は注目に値しよう。

3.4 ミュージアムのマネジメント

このミュージアムの本質については、マネジメントを抜きには理解できない。そこでさらに進んで、そのマネジメントについてみていくことにしよう。

総会は、組織の最高意思決定機関といえる。それは常時50人前後で構成され、理事会を下部組織に持つ。それぞれ館長、事務局、保守作業、企画担当（アクティビティ企画等）、公文書（アーカイブ）、デザインなどの専門職がスタッフとして存在するが¹¹⁾、スタッフの14名はすべてワロン州と雇用契約を交わしている。

すなわち、理事会（Direction）が執行機関の中心に位置し、インフォメーション/予約（Information / Réservation）、エンターテインメント/教育プログラム（Animations / Pédagogies）、運営/管理（Administration/Commande）、公文書保管（Archives）、グラフィックおよびウェブ・デザイナー（Graphiste & web designer）がそれぞれ

役割を果たす。

ただし、地域住民による運営管理参画は存在しない。運営管理に関与しているのは、産業史の専門家、Louvière市の代表者、Wallonie-Bruxelles連盟代表者、Hainaut州代表者などで構成される理事会メンバーのみである。

3.5 エコミュージアムの構造体系

エコミュージアムを構成する施設はいくつかある。インフォ・センター、サテライト拠点、探索・発見の道 (discovery path)、解説パネルのある見学通路 (sentiers d'interprétations) などがそれである。

多くのミュージアム同様、関連の深いさまざまな組織とネットワーク関係を持つことは、発展の必須条件である。2015年、ベルギーワロン州の都市、モンス (Mons) が欧州連合文化首都に指定された。このモンスと同年にエコミュージアムとが相互にパートナーシップ提携を果たしたことは象徴的であった。実際、地域圏内の文化センター、公文書センター「Couchant du Mons (モンスに集積されている) 産業公文書保存機関」、Hainaut州 (エノー州) 等とパートナーが生まれ、数種の活動計画作業が行われている。

3.6 財政

財政危機を抱えるのは、ベルギーも例外でない。多くの文化施設がそうであるように、エコミュージアムの持続的展開を考察するうえで欠かせないのは、財政についてである。エコミュージアム独自の収入源は全体の20% (25千ユーロ) で、ガイド付きツアー¹²⁾の収入が最も多く、ミュージアムショップの売り上げがそれに次ぐ。補助金は歳入全体 (125千ユーロ) のおよそ80%を占めるが、その内訳はルビエール市 (La Louvière)、エノー州 (Hainaut Province)、ワロン州 (Region wallon)、フランス語圏コミュニティ

(Communaute Francaise)からである。もとより、EUからの直接の財政支援はない。

国境を越えたプロジェクトも存在する。それは、欧州地域開発の一環として itenary (旅程) の作成である。フランスを起点にベルギーに至る観光の旅程作成プロジェクトがそれである。これは、EUの財政支援に基づくものではないが、産業遺産を巡る itenary (旅程) としてフランスとの協力により進められたものである。

3.7 入場者について

財政を検討するうえで、密接不可分にあるのは、入場者の推移についてである。

過去5年間の入場者の推移は、図表のとおりである。世界文化遺産に指定された2012年には入場者が増加していることが読み取れる¹³⁾。その国別内訳は、多いものからベルギー (ワロンおよびフランドル)、フランス、オランダ、イギリス、ドイツの順となっている。とくに、ユネスコ文化遺産指定後、海外からの入場者が増加傾向にある¹⁵⁾。

3.8 将来の方向性

ここまでの、このエコミュージアムの現状を外観してきた。では将来の方向性についてはいかなるものであろうか。この点についても触れておかなければならない。

炭鉱博物館とSAICOM.— Sauvegarde des Archives

図表 入場者の推移

	入場者
2015	3123
2014	5817
2013	7770
2012	7975
2011	7744

資料：ヒヤリングおよびVoici l'adresse du site web de l'écomuséeをもとに著者が作成

Industrielles du Couchant de Mons (モンスに集積された産業公文書の保存機関)と科学分野における合同作業を可能にし、共通合同見学を来訪者に提供する目的で、Robert Pourbaix 炭鉱博物館とボワ・デュ・ルックのエコミュージアムをグループ化するプロジェクトがある。

現在、コミュニティの住民の積極的受け入れが行われ、この住民を対象として様々な一連の活動を紹介している組織とも一緒に活動が行われている。すでに、この組織の協力・支援を受けた展示会の実績もある。将来も、こうした親善関係が保持され、新たなプロジェクトに協働して着手することが期待され始めた。

このようにして、特徴的なのは、ボワ・デュ・ルックのエコミュージアムの活動において、「成果よりもむしろ活動自体」にこそ重点があるということである。

3.9 文化観光とエコミュージアム

われわれは、ボワ・デュ・ルックのエコミュージアムについてこれまでみてきた。そこでは何が明らかとなったのであろうか。これについては、つぎのようにまとめることができよう。

すなわち、近代化の過程で炭鉱産業とともにこのまちが発展を遂げた。炭鉱労働者のみならず周辺の住民たちには光と陰が織りなす数多くの記憶が残されていた。もとより、放置すれば、他の産業遺産と同様、その無数の記憶は炭鉱産業遺産とともに、時の経過とともに消失を余儀なくされる。

ミュージアム活動の動向とともに、労働者の旧住宅の保全を含めた、さまざまなかけがえない遺産を、地域の貴重な資産として保存し、伝承していく工夫が考案され始める。そのプロセスは、ミュージアムの科学者、芸術家、学生、地域住民など多くの人的資源の協働から生まれていた。

やがて、こうした取り組みは、2012年にお

けるユネスコの世界文化遺産の認定に示されたが、国際的にみて、人類共通の遺産として守り、受け継がれるべき対象に位置付けられたのである。

3.10 内発的な文化観光

これら世界文化遺産としての位置づけは、ボワ・デュ・ルックというまちの衰退を食い止め、ミュージアムを中心とする新しい文化都市への転換を呼び起こす可能性を持つ。それは、このエコミュージアムが芸術家や科学者、住民の力を得て、見学者という人流を呼び寄せ、人々の場の記憶を次世代に伝えていく文化装置へと変貌していくからである。

ミュージアム鑑賞はインターネット配信での情報公開がなされてきている。だが、ミュージアムは単に展示物を観覧するだけでない。そこは、公の場、ふれあいの場でもある。友人や地域住民らと意見を交わし、偶然隣り合わせた人と知り合うことも多い。

こうしたボワ・デュ・ルックの思想は、文化観光とも呼べるものである。

ここで文化観光とは何かが問われる。文化観光がなぜ人的交流を生み出す可能性を持つのであろうか。

オーストラリアの文化経済学者、スロスビーに従えば、文化観光 (Cultural Tourism) には、文化フェスティバルや特別な文化地区を訪れることといった、特定の目的での訪問 (個人であるか団体であるかを問わず)、あるいはオペラや文学ゆかりの場所、地元のコミュニティ、遺跡、ギャラリーなど文化的なテーマで訪ねる長期の旅も含まれている。

職人・芸術家の存在とその生産物の創出は、やがて人流を生み出し、観光へと結びつく¹³⁾。

たとえば、スロスビーは次のように語っている。

「より特別な意味において、観光は、そ

れ自身文化産業というよりもむしろ、文化部門に含まれる他の文化産業—実演芸術、ミュージアム、ギャラリー、文化遺産など—の生産物の利用者とみなされうる。』¹⁴⁾。

文化を目的とする観光が求める経験の範囲には、以下のようなものが含まれるとされる。

すなわち、特定の実演芸術の公演、特定の博物館・美術館の訪問、芸術祭への参加、宗教的、文化的な聖地への巡礼、文芸あるいはその他の文化にゆかりのある場所への旅行、おそらく専門知識を持ったガイドを伴った考古学的あるいは他の文化的遺跡への訪問、文化体験をするために特定の地域社会の中で生活する等がそれである。

こうしたスロスビーの主張を前提とすれば、芸術家や職人たちが創造的に生み出す生産物の魅力こそ、文化を目的とする訪問客を生み出し、交流人口増加の契機になりうる。

同時に、スロスビーも述べるとおり、「街や都市、地域の経済生活の中での芸術や文化を考えると、創造的活動の空間的次元が観えてくる。創造ビジネスはどこに立地するのか。美術館や実演団体は周りのコミュニティにどのような影響を与えるのか。』¹⁵⁾。

スロスビーによれば、地域経済の空間的次元は国家的次元の小宇宙である。地域に文化産業、文化遺産、観光行動などの要因が取り込まれるようになれば、住民の生活の質への欲求が高まり、これに応えるかたちで芸術家らの創造活動が生み出されていく。

4. むすびにかえて

すでにみたように、場の記憶の保存・伝承は、都市や地域の再生を生む。その場合、芸術家、科学者、ミュージアム専門家、地域住民などの人的ネットワーク化と人材育成を前提とする。

文化遺産の取り組みは、結果として住民の生活の質への欲求の高まりを生む可能性を持つ。

こうした住民の生活の質に向けた取り組みとして、ベルギーの事例から私たちが学んだことは何か。それは、まず創造的な場づくりをもたらし新たな文化的投資を進めることではない。むしろ、その本質は、人的ネットワーク形成を公的に支援し、場の記憶の保存・伝承を公的に保障するシステムであって、それらをいかに構築していくかという点にこそあるといわなければならない。

注

- 1) Marksen, A. and Greg Schrock, *Consumption-Driven Regional Development*, Urban Geography, vol.30, no.4, pp.1-24, 2009
- 2) Marksen, A. (Rushton.ed.), *Creative Communities: Art Works in Economic Development*, Brookings Inst Pr/Brookings Inst Pr, 2013, pp.39-4
- 3) M.K. スミス・M. ロビンソン編『文化観光論』上巻、6頁
- 4) この博物館と協同組合的な組織はない。ただし、他の炭鉱関係文化遺産に関連している博物館と密接な協力体制の下に収集作業が行われている。たとえば、Robert Pourbaix 炭鉱博物館 (Bois-du-Lucに所在)、Bois-du-Cazier (Chareloi : シャルレロワ近郊にある旧炭鉱)、Blegny (Liège : リエージュ近郊にある旧炭鉱)、Grand-Hornu (Mons : モンス近郊にある旧炭鉱) 等がそれである。
- 5) ワロン地域政府を指す。
- 6) 地区全体はワロン州が所有し、修復の際もワロン州が入札する。
- 7) ここに労働者220所帯あるが、この中で住んでいる600人の中で炭坑産業に携わっている人は15人に満たない。
- 8) これは旧労働者住宅 (労働者の住宅保障としてあてがわれたもの) のことを指すが、今は一般住民が居住し、公営住宅としての位置づけである。
- 9) これは、いくつかの基礎自治体が再編成され、グループ化した地域圏を指す。
- 10) これは、ヨーロッパで行われる工事初日の式典のことである。
- 11) とくに出版については、科学委員会チームと企画員が相互に協力して行う。
- 12) ガイドは、ボランティアではなく、正当に報酬が与えられたスタッフがこれを行う。もっとも、ボランティアも存在し、定期的に作業、とりわ

- け公文書の記号化・符号化作業、受付業務を行っている。観光シーズン中は週末の見学者のためにパートタイムのスタッフが起用される。(パートタイム・スタッフの報酬支払はHainaut州より拠出)。
- 11) ミュージアムの開館時間は、月曜が閉館で3月中旬～10月末日では週末及び祭日の10:00～18:00、11月～3月中旬:火曜から金曜の09:00～17:00、最終見学出発時刻は15:00となっている。
 - 12) 国別での見学者多いのはアメリカ合衆国、南米、オーストラリア等で、アジア諸国からの見学者が少ない。
 - 13) Throsby, D. *Economics and Culture* Cambridge: Cambridge Univ.Press, 2001, pp.128-130
 - 14) Throsby [2001]、p.129
 - 15) スロスビー [2014]、p149
- 参考文献**
- Le Centre, une région façonnée par l'industrie*, coll. Les Carnets du Patrimoine, n° 82, Namur, 2011.
- DEWIER A., HAOUDY K. et SIRJACOBS I., *L'Industriel dans La Louvière, une ville s'invente... Bâtisseurs d'avenir*, La Louvière, 2012.
- DEWIER A., *La Louvière*, coll. Mémoire en images, Grande-Bretagne, 2006.
- DEWIER A., *La Louvière, tome 2 – Les Hameaux*, coll. Mémoire en images, Grande-Bretagne, 2007.
- DEWIER A., *La Louvière, tome 3 – L'entité*, coll. Mémoire en images, Grande-Bretagne, 2008.
- ECOMUSEE DU BOIS-DU-LUC, sous la dir. de, *Baume & Marpent. De la Haine au Nil... Itinéraire d'un géant*, La Louvière, 2008.
- ECOMUSEE DU BOIS-DU-LUC, sous la dir. de, *Itinéraire de la Culture Industrielle. Carnet d'exploration*, La Louvière, 2011.
- HAUDY K., *La Louvière, une ville Made in industry* dans MAQUET J., sous la dir. de, *La Louvière. Le patrimoine d'une métropole culturelle*, Institut du Patrimoine wallon, Namur, 2012.
- Le site minier du Bois-du-Luc, patrimoine universel*, coll. Les Carnets du Patrimoine, n° 63, Institut du Patrimoine wallon, Namur, 2009.
- Un microcosme social dans Les sites miniers majeurs de Wallonie, patrimoine mondial. Le Grand-Hornu, Bois-du-Luc, le Bois du Cazier et Blegny-Mine*, coll. Les Carnets du Patrimoine, n° 96, Institut du Patrimoine wallon, Namur, 2012.
- LIEBIN J., *Bois-du-Luc en images*, La Louvière 1993.
- LIEBIN J., sous la dir. de, *Le Centre*, coll. Mémoire en images, Grande-Bretagne, 1998.
- ECOMUSEE DU BOIS-DU-LUC, *Temps Libres. Panorama des loisirs dans la région du centre*, coll. Mémoire en images, Grande-Bretagne, 2010.
- SIRJACOBS I., *De l'ancien au nouveau canal du Centre, un patrimoine audacieux porté par l'eau* dans MAQUET J., sous la dir. de, *La Louvière. Le patrimoine d'une métropole culturelle*, Institut du Patrimoine wallon, Namur, 2012.
- Throsby, D. *Economics and Culture* Cambridge: Cambridge Univ.Press, 2001.
- Landry, C. *The Creative City: A Toolkit for Urban Innovators*, London, Commedia, 2000.
- Marksen, A. and Greg Schrock, *Consumption-Driven Regional Development*, Urban Geography, vol.30, no.4, 2009.
- Marksen, A. (Rushton. edit.), *Creative Communities: Art Works in Economic Development*, Brookings Inst Pr/Brookings Inst Pr, 2013.
- Voici l'adresse du site web de l'écomusée (disponible uniquement en français pour le moment, les versions anglophone et néerlandophone sont en cours de traduction) : <http://www.ecomuseeboisduluc.be/>
<http://www.ecomuseeboisduluc.be/>
- 大原一興『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会、1999年。
- 国連貿易開発会議 (UNCTAD) (明石芳彦・中本悟・小長谷一之・久松弥生訳)『クリエイティブ経済』ナカニシヤ出版、2014年。
- スロスビー, D. (後藤和子・阪本崇監訳)『文化政策の経済学』ミネルヴァ書房、2014年。
- M.K. スミス・M. ロビンソン編『文化観光論』上巻、古今書院、2009年。

